

令和3年度 まちづくりトーク 主な意見

開催日： 10月28日(木)

会場： 粟屋コミュニティセンター

1. 地域の防災

項目	参加者の発言	市の発言
近年の水害	<ul style="list-style-type: none"> ・内水被害は、丸大ハムの敷地から浸水するが、今回は浸からなかった。しかし、上流については、浸水して、被害が出た。 ・避難所であるコミュニティセンターにも多く避難され、粟屋西自治交流センターにも避難された。内水被害が生じる箇所はわかっている。越水する可能性がある地域もある。 ・上村川と河愛川の合流地点で浸水があった。 ・旭地区は、冠水すると孤立の恐れがある。長伝に登り、高北農道へ出る迂回路があったが、倒木があれば、高宮を迂回するしかない。救急の場合に、救急車がたどり着くか不安があった。 ・たびたび床上浸水するので、引っ越しを考えておられる方もいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の豪雨は上流で降った雨の影響があった。高谷山を中心にして集落が点在しており、土砂災害危険区域にあるなど、リスクが多い地域であり、不安も大きかったと思う。 ・市では、排水ポンプ車を独自に購入し、昨年度から運用を開始した。国の排水ポンプ車も含め、各地域で機動的に運用されており、丸大ハムは排水ポンプ車に対応した。排水ポンプ車を市独自で整備しているのは、中国地方でも少ない。市街地に大きな3つの川が合流し水害リスクも高いことから設備は必要である。内水対策として、広島県にも機動的に使える排水ポンプ車の配備要望を出している。
避難及び避難所	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に、コミュニティセンターに避難したことがあるが、今後は避難しようという気持ちにはならない。コロナのこともあり、窮屈であった。 ・避難しなくても大丈夫だという考えがあり避難されない方もいるが、音声告知で避難情報を聞いて、早めに地域の集会所に避難される方もいる。 ・住民は稲荷町のグラウンドの水位が避難の目安となっている。グラウンドの冠水状況を見て、避難行動について判断ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昔とは気象環境が違うという現状を認識してもらい、避難をしてもらいたい。避難誘導して助かった命もあるので、災害リスクが高い地区の方々への避難の呼びかけを引き続き行っていく。 ・地域で集まれる避難所があればいいと思う。今後、避難所のあり方など、地域の方々と連携をして考えていきたい。 ・稲荷町グラウンドは、何度も浸かっており、土砂が流されたことなどから、今後は浸水して被害を受けたとしても、完全復旧をしない方針であることを報告させてもらう。
土砂について	<ul style="list-style-type: none"> ・江の川、馬洗川の土砂浚渫工事をしていただき、水位が低かったことで、三次が水瓶になってしまう。日下地区から地形的に山間部が狭隘になるので、水が流れにくい。 ・丸大ハムの下流から河幅が狭くなるので、水の流れが速くなる。兩岸の土砂や川底の土砂が洗掘され、流れ出し、大きい岩しか残っていない。竹藪などでブロックがないところはどんどん狭くなってきており、県道に寄ってきている。県道の要望も出しているが、要望が聞いてもらえる頃には、道路がなくなる可能性もある。国(国土交通省など)に言ってもらいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・巴橋の下などへ中洲ができているので、継続して、国(国土交通省)に川底を深く保つように要望している。
音声告知放送	<ul style="list-style-type: none"> ・粟屋はケーブルテレビの加入率が高く、音声告知放送は助かっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・防災・減災のため、地域の皆さんの安全を確保するためにも速やかに情報発信をする。日ごろから防災意識が高められるような活動をしていきたい。
排水ポンプ車	<ul style="list-style-type: none"> ・排水ポンプ車は、緊急時に、内水被害があるところに来てくれるのか。畠敷については、常設のポンプ場も整備されていると思う。燃料がないなどの問題がないようしっかり管理してほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各地内水の状況に応じて、排水ポンプ車を回すよう運用をしている。排水ポンプ場は、水があるときしか運転ができない。試運転ができないため、機械の故障はあるものだという前提にシミュレーションし対処していく。

令和3年度 まちづくりトーク 主な意見

開催日： 10月28日(木)

会場： 粟屋コミュニティセンター

2. 持続可能なまちづくりについてなど

項目	参加者の発言	市の発言
自治活動と粟屋の宝	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者が多く、若者は市街地に移住をする。まちづくりの自治会も高齢者が多い。高齢者がいきいきと住んでいくような活動を進めなければならないと考えている。 ・粟屋は市街地に近いことから、荒瀬に若い人が入ってきている。子どもも増えている。一方、集落は一人暮らしが多く、集落の維持が難しい。 ・粟屋の宝は、高谷山の展望台。今年はコロナでも緑の山に癒されるのか平日でもたくさんの方に来ていただいている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・市民の健康寿命を延伸できるかが大きなテーマである。また、地域の交流が大事であり、自治会の活動・イベントの重要性や役割をコロナによって再認識をした。今までどおりのイベントができるように、自治連の皆さんと協力しながら、できることからチャレンジしたい。 ・高谷山については、今回のコロナで田園・自然回帰があることから、ニーズも多い。自然豊かな三次の地域の良さを都市部の人にアピールし、コロナを大きな転換期ととらえて、三次全体の活性化を考えていきたい。今後も粟屋の魅力を発掘できればいいと思う。
小学校・中学校区について	<ul style="list-style-type: none"> ・粟屋小学校のグラウンドは芝生だが、管理(年5回の芝刈り)が大変である。しかし、子どもたちが安心して遊んでいる姿を見るとホッとする。 ・粟屋は中学校区が分かれている。西、中、北の地域のつながりは、粟屋まちづくり協議会でつながっているが、中学校区が分かれているので、地域の付き合いが少なくなった。 ・児童数が少ない。学区が自由になったことから、親の考え方により学区を選び、十日市小学校や酒屋小学校に行く子どももいる。逆に、小規模校がいいということから、他の学区から粟屋小学校に来られる子どももいる。小規模校の良さをしっかりPRし、子どもに粟屋に来てほしい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校のグラウンドは市内で唯一芝生である。 ・学区の自由は、親として子どもの選択肢が増えることでいい面もあるが、地域としてマイナスの面もある。これまでは、いつの時点でも学校を市全域で選択できていたが、現在は、小学校や中学校に入る前に決めることとなっている。自由化になれば何もがいいということもなく、弊害もある。一方で、選択の自由も必要だという意見もある。
中高一貫校	<ul style="list-style-type: none"> ・県立三次中学校・高等学校 中高一貫校はどのような状況か。 ・市外から県立三次中学校・高等学校に親が連れてくるケースがある。学校があること自体が地域の特色である。学校がなくなると地域の特色がなくなる。 ・小さい学校の勉強ができる子は県立三次中学校・高等学校に進学し、地元の中学校在学が成立しなくなる。現在、三次市では「帰ってくる教育」はしていない。地元に残るには、どのような教育をするのか課題である。親としても、地元に戻ってこいとは言えない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今年で開校3年目である。今のところ、県立三次中学校・高等学校ができたことのメリットは出ていると思うが、寮がないため、遠くから来られる人は限定的だと捉えている。市内の子どもが集中し、市内の中学校・高校の子どもたちが減少するのではないのかという懸念もある。県立三次中学校・高等学校ができたことで、三次市全体の小学校・中学校が活性化するように進めている。 ・郷土愛について、教育ビジョンの中で掲載している。今年、郷土愛について、垣間見れた事業があった。「ふるさと学生応援事業」で、コロナ禍で帰省が困難な学生に三次市の特産品などを送ったところ、学生からメール、SNSなどを通して、子どもたちの郷土への思いを素直に返してもらえた。「ふるさとへの気持ち」は確実に育まれているように感じた。帰って来れるような環境を作らなければならないと思う。 ・光ケーブルを活用して、定住者を増やす取組をし、今あるものを生かしたい。
保育所	<ul style="list-style-type: none"> ・保育所について、母親が就職先を見つけるまで入所ができなかった。預けたくても預けられない人もいる。働けるように制度を変えたらどうか。 ・親の勤務先に応じて、保育所を選んでいるが、地域の子どもの数が少ない。保育所の子どもたちとの地元の行事もできない状況である。 	<ul style="list-style-type: none"> 勤務証明書を提出していただくことで、保育所に入所できるなど、緩和もしている。